

るかないかわかんない日」
うししと桜庭は笑った。

非常にむかついたが、桜庭は浩二の気持ちになどまるで頓着しないようだった。

「私はねえ、三月三日なの。お雛様。女子の日よ」

たずねもしないのに、アピールしてきた。

「ね、ぴったりでしょう？」

黙っていると、更に付け上がってくる。一応質問の形をとっているが、否を言わせぬ強引な態度。三月三日の日めくりをひっぺがして、顔にびったり張ってやりたい気分だ。三の数字を貼り付けた桜庭が、ふがふがしているところを想像すると、少し愉快になり、浩二は笑いかみころす。「ねえ知ってる？ 四十人くらいのクラスだと、同じ誕生日の人が98%の確率で存在するんだって」

話が急に現実に落ちてきて、浩二は意識の焦点を合わせたが、全く合点がいかない。

「なわけないよ、ね。自分と同じ誕生日の奴がクラスに必ずいるとなると、一クラスに二十個の誕生日しか存在しなくなるじゃない。」

小さな声で疑問を述べる浩二の前で、桜庭は大きく手をふった。

「そうじゃなくって、クラスに同じ誕生日の人が一組はいるってことよ。98%の確率で」

そういう計算になるのか、と、数学好きな浩二は試算を始めてみる。

「わ、鈴木。なに計算なんかはじめてんの。う、きもーい」
桜庭は顔をしかめて逃げて行った。数字が苦手らしい。

十月の日数も知らなかったくらいだから無理もない。試算はなかなか進まないが、撃退法を発見しただけでも有意義だったと浩二は思う。

自分の部屋で、浩二は机の一番上の引き出しを引いた。浅くて広いスペースには、一目みてわかるように、シャーペンの芯や新しい消しゴムなどの消耗品、色鉛筆のセットや彫刻刀、鉛筆ホルダーなどのこまごました文房具が入っている。使用頻度にあわせて、手前から順に並べてあって、消耗品は使ったら必ず補給しておく。

浩二は引った張った引き出しの一点をじっくりと見つめた。左の一番奥。あまり使わないポジションにあるそれだが、実は見つめる頻度が一番高い。

迷いに迷ったが、手をのばしてそれをそっとつかむ。この上なく柔らかなポケットティッシュだ。淡いピンクのビニールの裂け目から、一枚つまんでゆっくりと引っばると、ティッシュはしゃらりと繊細な音をたてて、ひるがえるように出てきた。ふわりと花の香りがする。

浩二はティッシュを鼻にあてて呼吸を試みる。